



卓 話



「縄文との出会い」

縄文文化研究家 石埜 穂高氏

1. 縄文とは

「日本列島に広がっていた世界最古の土器文化」

縄文文化とは、今から約16,500年前から約3,000年前まで、1万年以上にわたって続いた日本列島主要部の新石器文化だ。



以前は原始的で未開な文化と考えられていたが、青森県の三内丸山や福井県の鳥浜など、大規模遺跡や低湿地遺跡（土器や石器以外にも、木器や漆器などさまざまな有機物が出た）の発掘調査によって、相当高度な文化だったことがわかってきた。

- 現在のところ世界最古の土器文化（青森県大平山元遺跡：約16,500年前）
 - 世界で最も長く続いた文化（10,000年以上）
 - 漆を発明した文化（鳥浜遺跡の漆の櫛は縄文前期、約5,500年前）
 - 動植物を大切にし、自然と共生した文化
 - ドングリ拾いだけで年間必要カロリーがまかなえた労働量の少ない文化
 - 弱者に優しく、障害者でも天寿を全うできた文化
 - 日本神話のルーツとなる神々をまつた文化
 - アクセサリーを好み、デザイン性の高い服を着た文化
 - 漁業や農業、さらに海を渡って幅広い交易も行った文化
 - 世界で最もくわしく明らかにされている先史時代の庶民文化
 - 「孤独」というものが存在しなかった文化
- こうした特徴が、現代に求められるエコロジーやサステイナビリティの考え方によく合っていることが、縄文が今改めて注目を集めている理由の一つだろう。

2. 縄文の美

「野生のエネルギーをくれるもの」

縄文土器の美は、今改めて世界に大きなインパクトを与えている。それを最初に「発見」したのは、岡本太郎だった。当時「日本の美」は均整の取れた弥生土器から始まるもので、縄文土器は野蛮な工芸品と見なされていた。だが岡本太郎は、縄文のエネルギーや呪術性、非対称性こそが、日本の伝統の根源だと直観したのだ。

岡本太郎のこの「発見」は、ヨーロッパのアーティストたちが、アフリカやオセアニアの伝統美術や原始美術の美を「発見」してきたことと軌を一にしている。現代芸術は、エスニックアートや原始美術を起爆剤に、「自然の姿の再現」という古典芸術の枠組みから抜け出して、「心の動きそのもののダイレクトな表現」というまったく新しい段階に入ったのだ。

一方、人類学や民族学は、先住民文化や原始文化の世界観の共通性・類似性を次々に明らかにしてきた。そこにあったのは、天地の万物に精霊が宿るという、アニミズムやトーテミズム、シャーマニズムの世界観だった。縄文人たちも、同じ心性で土器や土偶を作っていたものと考えられている。

縄文の美は、僕らにまるで野生のエネルギーをくれるかのような強い印象を不える。それは、欧米人がはじめて先住民アートや原始美術に出会ったとき受けたインパクトと同じ種類のものかもしれない。だが同時に、日本人にとっては「直接の祖先のアート」という、さらに大きな意味を持っているはずなのだ。そのことをこれから考えていきたい。

3. 土器・土偶の宇宙観

①土偶に込められた祈り

先頃、ロンドン・大英博物館と東京国立博物館で「国宝・土偶展（POWER OF DOGU）」が大成功を収めた。ロンドンでも東京でも、みんなが確かに土偶のPOWERを感じたのだ。土偶のほとんどには、乳房や女性器が表現されている。だから土偶は、豊穡の女神（大地母神）を表現したものではないかといわれている。

興味深いのは、特に縄文中期に多いというが、ほぼすべての土偶が首や手足をもがれ、別々の場所に埋められていることだ。豊穡の女神は、殺されて埋葬されたのだ。

思い出されるのは、まず古事記の食物の女神オオゲツヒメが、スサノオに殺されて身体の各部から五穀や蚕を生んでいることだ。日本書紀では、口から米や魚、肉を吐き出して与えようとしたウケモチノカミ（保食神）が、ツクヨミに殺されている。実は、同様の神話はハイヌウェレ型神話と呼ばれ、アジアや環太平洋地域に広く見られるという。

こうした神話には、秋に一度死に、春また蘇る植物の実りが象徴化されているのだろう。そのイメージは、満ち欠けを繰り返す月や、初夏に現れ秋にはいずこへともなく姿を消す蛙にも重ね合わされているという。

このような人類共通の「原始の思考」に貫かれているからこそ、土偶が僕らに訴えかけてくる力は強いのかもしれ

ない。

②縄文土器に託された女神たち

そのような神話的思考によって、中部から関東の中期縄文土器に描かれた複雑な文様を読み解こうとしている人たちがいる。定説とは言えないようだが、その内容にはとても興味深いものがある。

顔面把手付深鉢という、土器の内部をのぞき込むかのような顔がついた土器がある。その中には、土器の腹から生まれようとしている新生児が表現されたものさえある。土器そのものが、食物を生む豊穡の女神の子宮に見立てられているのだ。実際に顔面把手付深鉢は、土偶のように首が打ち欠かれて出土する例がほとんどだという。煮炊きによって食物を生み出す土器は、みな女神の子宮と考えられていたのかもしれない。

有孔罎付土器という、果実酒づくりに使われたらしい土器がある。ていねいに作られた作品が多く、中にはアジアやオセアニアの神話と呼応するように、蛙や月らしき文様が描かれた作品もある。原始の思考では、果実が死んで酒として生まれ変わるプロセスが、蛙や月、豊穡の女神の死と再生になぞらえられたのかもしれない。

さらに、人面香炉型土器という怪異な形の、おそらくは祭の際のランプとして使われた土器もある。表面は、炎を胎内に宿す女神の姿。裏面は恐ろしいドクロ、あるいは蛇の髪を持つメデューサのようだ。あるいは、イザナミが火を生んで死に、黄泉の国で恐ろしい姿に変化したところを思わせる。これはつまり、日本神話や、アジア～環太平洋地域の神話に語られている豊穡の女神が、縄文時代の日本列島に生きていた、という話なのだ。

③カプセルとなった土器たち

縄文土器には、さらにもうひとつの役割があった。甕棺（かめかん）…ひつぎだ。縄文中期にはじまり、次第に日本列島全体に広がったという。

釈迦堂遺跡の例では、大きな水瓶の底にわざわざ穴をあけて使えなくしてから、伏せて大人を埋葬していた。三内丸山遺跡では、新生児や乳幼児の遺体だけを、小さな甕に入れ1か所に集めて埋葬していた。

墓に見る縄文時代の死生観は、僕ら現代人の意識とはかなり違う。たとえば三内丸山遺跡では、ゴミ捨て場から多くの遺体が見つかる。だがそれは「遺体をゴミとして捨てた」というより、「ゴミも遺体のように葬った」と見た方がいいらしい。モノにも魂が宿ると信じられていたのだ。

一方、関東や中部の縄文のムラの多くは、先祖を埋葬した広場を家々が取り巻く環状集落という形をとっている。墓に不気味さやけがれのイメージがなかったのだろう。縄文人は、毎日祖霊と一緒に生活していたのだ。

壺に入れたのは、死者ばかりではなかった。出産の際の胞衣（えな＝胎盤）も、小さな土器に入れて住居の入り口付近など、人がよく通る場所に埋めていた。家族が踏み固めることで、子供の命がしっかり根付くように願ったのだろうか。

驚くべきことに、この胞衣壺（えなつぼ）の習慣は、つい最近まで、日本の各地に残っていたという。こんな話を聞くと、土器…が、命を包んであの世とこの世、時間を旅す

るカプセルのように思えてくる。

4. 石と柱の宇宙観

「石と柱に込められた祈り」

縄文の宇宙観を探るもう一つの手がかりとして、石造建造物が挙げられる。遺跡から発掘されるさまざまな遺構の中で、最も印象的なものの一つが環状列石、いわゆるストーンサークルだ。日時計とも墓所ともいわれるが、祭の場であったことは間違いない。訪れてみると、どの環状列石もひらけてすがすがしい場所にあり、まさにパワースポットという印象だ。

環状列石に関連して、石棒と呼ばれる男根形の遺物も特徴的だ。配石遺構の中に立てられていたり、住居の中で石皿（臼として使われ、女性器にも見立てられた）などと向かい合わせに置かれていたり、さまざまな状態で出土する。豊穡の神が女神なら、当然男神も必要なわけだ。このように縄文文化からは、常におおらかなセクシュアリティが感じ取られる。

立てられるのは石ばかりではない。祭などの際に木の柱を立てたと思われる遺跡も多い。チカモリ遺跡の環状木柱列や、特に三内丸山遺跡の巨大6本柱は、全国に強烈なインパクトを与えた。これだけの柱立てには、現代人でもものすごい労力が必要だ。なぜ、何のために立てたのだろう。

石柱や木柱を立てる祭は、世界の先住民文化に共通して見られる。人類学や民族学によると、その意味は天と地をつなぐもの。大地から天空に向けて立てられたアンテナだ。冬至や夏至などの節目の日に、太陽を刺激してその運行を元気づけるのだという。そうした柱立て祭の伝統は、実は現代社会の驚くほど身近なところで生きている。

5. 縄文を受け継ぐもの

①柱立て祭の伝統

現代に残る最大の柱立て祭は、アリガマガだ。すっかりキリスト教の祭になっているが、おおもとは北ヨーロッパの冬至祭だという。キリストの誕生日ではなく、太陽の誕生日というわけだ。1年でいちばん太陽の力が弱まる冬至に、大地に常緑樹を立てて天を刺激し、再び夏の強力な太陽が戻ってきてくれることを祈る。ニューヨークのロックフェラーセンターのクリスマスツリーも、献木による生木なのだという。祈りの伝統が生きているのだ。

日本にも同じ祭が残っている。正月だ。門松はクリスマスツリー。しめ飾りはクリスマスリース。どんど焼きはボンファイア。それぞれ同じ意味を持つ。同じ意味の祭なので、僕らはクリスマスが終わったらツリーをさっさと片付けたくなる。ツリーと門松が同居していると、なんだか居心地が悪いのだ。

日本には、実は他にも柱立て祭は数多い。古くは、弥生時代の吉野イ里遺跡の王の墓の正面に、柱立ての跡が発見されている。諏訪大社の御柱祭は有名だが、伊勢神宮の遷宮祭も、その核心は「心の御柱」という、社殿の中心に隠された柱を立てる祭だという。考えてみれば、日本の神様は「一柱、二柱」と数えるのだから、神社には柱が立って当然なのだろう。神社だけではない。善光寺では7年に一度の御開帳の際に、本堂の前に巨大な卒塔婆「回向柱」が立てられる。また、新盆を迎えた家で「高灯笼」というまさにアンテナのような柱を建てる風習が残っている地方も多

い。これら全てが縄文から受け継がれているものかどうかは何ともわからないが、柱立て祭を行う心性が、縄文や世界の先住民文化と深いところで繋がっていることはまちがいないだろう。

②仏教と石の神・木の神

世界のほとんどの地域では、先住民文化とその宗教は、後から来た民族に制圧されたり、世界宗教によって塗り替えられている。アフリカンも、ネイティブアメリカンも、アボリジニも、マオリも、イヌイットも、アイヌも。縄文も長く同じだと思われていた。だが、縄文人は弥生人に征服されたわけではなかった。自ら徐々に弥生化していったことがわかっているし、その後仏教が伝来しても、縄文以来の世界観を捨ててしまったわけではない。

いい例が石棒だ。関東甲信越の広い地域では、今も縄文時代に作られた石棒が道祖神として、また石神（シャクジン。シュクジン、ミシャグジ、シャクジ、シャモジ、ショウグンなどとも呼ばれる）としてまつられている。中央線沿線の天祖、八幡、白山などの神社の多くでは、石棒がご神体としてまつられているか、かつてまつられていたという。

石のお地蔵様も、石棒や石神、道祖神と習合している。それが証拠に、首が取れたお地蔵様でも、代わりに丸石を乗せてそのまま拜んでいる。これがもしキリスト像やマリア像だったら、大変なことだ。ここで日本人は、地蔵菩薩を「偶像」として拜んでいるのではなく、「石」として拜んでいるのだ。このことは木造仏にも当てはまる。仏教が伝来して間もない平安時代には、一木造といって、基本的に1本の木から仏像を彫り出していた。関東や東北の地方仏では、鉈目といって、わざわざ1本の木から彫り出していることが見てわかるような仕上げをしている。だから僕らは仏像を拝観するとき、同時に素材である「ご神木」を拝観しているのだ。このように日本では仏教もアニミズム化した、或いは縄文化したといってもいいだろう。

③世界遺産・熊野古道の意味

jomonismは今、三内丸山遺跡をはじめ「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」のユネスコ世界遺産登録を応援している。ここで先輩としてぜひ注目しておきたい世界遺産がある。「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道、大峯奥駈道、高野山町石道）」だ。

正式タイトルからよくわかることだが、この世界遺産は、神道（熊野三山）、修験道（吉野・大峯）、仏教（高野山）という3つの宗教の聖地の集合体だ。紀伊山地は和歌山県の世界遺産公式ホームページによると「神話時代から神々が鎮まる特別な地域と考えられてきた」。つまりは縄文時代からだ。そこに3つの異なる宗教が集まり、千年以上にわたって共存してきたのだ。

3つの宗教が集まる聖地、というと、グローバルには同じ世界遺産のエルサレムがある。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教共通の聖地だ。ところがエルサレムは、千年以上も続いている紛争・戦争の場だ。3つの宗教がみな唯一神教で、互いに相手を許さないからだ。

一神教は厳しく強い。だから大航海時代以降、世界の社会や文化を支配することができた。科学万能主義や経済至上主義も、一神教から派生した強者の思想といえるかもしれ

れない。それらが悪いといっているわけではない。ただそれらが全てではないことははっきりしてきた。今、唯一神を持たない仏教や、縄文以来のアニミズムの世界観を、もう一度みんなが真剣に見つめ直してみなければならぬのではないか。「紀伊山地の霊場と参詣道」は、そのことを訴えている世界遺産だ。縄文遺跡群も、またそういうメッセージを持った世界遺産でなくてはならない。

6. 心の中の縄文

①鍋とお払いとお守りと

僕らの心の中には、縄文以来の価値観が意外と色濃く残っている。身近なところでは鍋だ。寄せ鍋を囲む時、金属の鍋ではどうも雰囲気が出ない。鍋はやっぱ土鍋に限る。取り皿もレンゲも陶器製がいい。つまり、みんな土器だ。鍋料理は僕らにとって縄文以来の伝統食なのだ。

もう一步踏み込んで、僕らの宗教心について考えてみよう。神道は、常にモノに魂が宿るというイメージがベースになっている。だからとてもアニミズム的で、つまりは縄文的な宗教だ。

欧米人は、日本人が神社でクルマのお祓いをしてもらっているのを見て、驚いたり笑ったりする。世界の自動車産業をリードするハイテク国家の国民が、交通安全を「まじない」に頼ろうとするのがおかしいのだ。だがクルマどころではない。最先端ハイテク工場だって、着工時に必ず地鎮祭をしているはずだ。ボイラー室には神棚が祭られているかもしれない。

宗教を離れたところでも、日本人は世界一洗車が好きな民族だという。クルマは単なる道具ではなく生き物なので、きれいにしてやりたいのだ。道具など、鋸、包丁、鉛筆でも、僕らは魂を持つもののようなイメージで大事に扱ってきたような気がする。

②ヒューマノイドロボットの国

ロボットというと、僕らはまず人型=ヒューマノイドロボットをイメージする。技術者たちも、多くの企業や研究所で、直立二足歩行ロボットや介護ロボット等、ヒューマノイドロボットを次々に開発している。しかしどうやらこれは日本だけの特殊事情のようなのだ。日本以外の国では、ヒューマノイドロボットは殆ど作られていないという。海外の技術者たちにとって、ロボットとは人間の命令に忠実に従う建設機械のような存在なので、その外見や動作を人に似せたり、あるいは犬や猫などに似せたりすることに殆ど関心を持っていないのだ。

ロボットという言葉は、1921年、旧チェコスロバキアのカレル・チャペックが初めて使った。また1950年代にアメリカのアイザック・アシモフが提唱した「ロボット三原則」も有名だ。だがその後現在まで、ヒューマノイドロボットに関心を持ち続けてきたのは、世界の中で日本人だけだったようだ。鉄腕アトムや鉄人28号に始まるロボットアニメが人気を博し、数えきれないほどのロボットキャラが今も新たにつくられ続けているのは、日本だけだ。技術者たちも、その影響を強く受けていることは間違いない。ロボットが意思や感情を持つイメージは、やはり「モノに魂が宿る」というアニミズム的なものだ。ヒューマノイドロボットの活躍も、もとはといえば僕らの「心の中の縄文」のせいなのだ。

③「カワイイ」の根っこ

「カワイイ」というコトバは、今や国際語だ。元祖日本では、「エロカワイイ」「大人かわいい」「キモカワイイ」etc. と、果てしなく展開している。そこには、英語の「cute」には収まりきれない意味があるようだ。ハローキティに始まるサンリオキャラクターは、日本的「カワイイ」の最大の発信源のひとつだ。実はそのキティちゃん以降の日本のキャラクターには、デザインの点で欧米のキャラクターと大きく異なる点がある。目の間が離れているのだ。欧米のキャラクターは、殆ど目の間がくっついている。ハローキティ以前の日本のキャラクターもそうだ。これはどういうことだろう。目の間が離れているのは、胎児や乳幼児の特徴だ。人間も動物も、成長すると目の間がくっついてくる。だから欧米キャラクターは成長した少年少女か大人を表しており、日本のキャラクターは乳幼児かウーパールーパー（幼形成熟個体）ということになる。

ここで思い出されるのが縄文の土器や土偶だ。顔面把手付深鉢の胴部から生まれ出ようとしている赤ちゃんは、まさに目の間が離れたウーパールーパーの顔だ。そしてそれは、顔面把手の豊穡の女神の顔とまったく同じ顔なのだ。縄文のヴィーナスの顔も、実は赤ちゃんの顔ではないか。

「カワイイ」キャラクターデザインや、「カワイイ」という概念の根っこには、胎児や幼児性を神聖なもの（アイドル＝偶像）と見る、縄文以来のイメージがありそうだ。

④縄文に触発されたアートと、縄文的アート

岡本太郎以後、縄文土器や土偶の美に触発されたアートやデザイン作品は多い。それらの共通点は何だろう。一つは縄文的な地母神神話のイメージ。豊穡の女神と胎児が生命の循環を繰り返すイメージだ。やはり岡本太郎の作品が、その最高峰なのだろう。

もう一つは、モノに魂が宿ったかのように、物質の中からエネルギーが満ち溢れてくるイメージだ。それは視覚だけでなく、作るときの触覚、また作品に触れる時の触覚にも直接訴えてくる。こうした作風は、アウトサイダーアートやエイブルアート（知的障害者の芸術）にも多数見られるので、必ずしも直接縄文の美に触発されたものではなく、これまで述べてきた「心の中の縄文」から生み出された作品といえるのかもしれない。

jomonismメンバーの目から見ると、インダストリアルデザインやグラフィックデザインの分野にも、時折とても「縄文的な」作品が現れてきている。それらは、ガンブラやトランスフォーマーなどのメカニカルなイメージや「カワイイ」の文化、オタク文化と重なり合いながら、世界に「Cool Japan」のムーブメントを発信しているようだ。

7. Native Japanese Style

「Native Japanese Styleとは」

jomonismのメッセージ、“Feel the roots”には、メンバーの2つの思いが託されている。1つ目は、“roots”という複数形に込められている。縄文は僕らにとって唯一絶対の“the root”ではない。これまで見てきたように、先史時代や先住民文化の世界観には、深いところで大きな共通点がある。人類はそんな「原始の思考」の上に、強力な宗教や科学技術や経済システムを積み上げて、巨大な文明を作り上げてきた。それはいわば、1輪の花や1羽の鳥にじっくりと向かい合うことなく、「なんだ、〇〇の花か」「なんだ、××鳥か」と、名前をつけては放り投げてきたようなものだ。そうしなければ、今日の「繁栄」は得られなかったに違いない。けれど今その「繁栄」のあちこちに、軋みや綻びや矛盾が噴き出している。きっと僕は、もう一度1輪ずつの花、1羽ずつの鳥の言葉に耳を傾けなくてはならないのだ。

Native Japanese Styleは、そこから始まる。けれど、Native AmericanやNative African、アボリジニやマオリやイヌイットやケルトやアイヌや琉球等々、世界中の先住民のスタイルも、きっとそこから始まっている。僕らは、広い地球の上の「一（いち）ネイティブ」として、「先進国」と呼ばれる文明のヨロイの下から、動植物やモノたちや天地の声に耳を傾けて、「心の中の縄文」から自然に発してくる、うきうきするような、わくわくするような、もっと格好いい、もっと可愛い、生命のバイブレーションを広げていきたいのだ。

「Feel the roots - いつも地球のルーツを感じていたい」

もう1つの思いは、“Think”ではなく“Feel”という言葉づかいに込められている。考えること＝論理も勿論大切だが、まず五感で感じることを大事にしたい。そして創造・表現・共感・共有・交流を通じて、いま壊れかけているこの世界を、もう一度自分たちのものとしてとらえ直していきたいのだ。

jomonismのメンバーは、メッセージ“Feel the roots”の後に続けて、自分のメッセージを加えることになっている。例えば

Feel the roots,... Be in love with your life.

Feel the roots,... Burn your heart.

Feel the roots,... Find your route!

Feel the roots,... Free our minds!

Feel the roots,... Not alone.

Feel the roots,... Think the life.

Feel the roots,... Touch the spirits.

あなたも是非この後に、あなたの言葉を続けて欲しい。